

Pembroke's Men とヘンリー 6 世 3 部作の接点 ヘンリー 6 世 3 部作の成立の過程・最終章

平松 哲司

Pembroke's Men はエリザベス朝・スチュアート朝の劇団の中でもひとときわ不可思議な劇団である。それまで地方都市での上演の記録がわずかに残っているだけのマイナーなこの劇団は、1592年のクリスマス・シーズンに突然宮廷に招かれ二回の公演を果たした。疫病の蔓延でロンドンの劇場が一時閉鎖されると他劇団同様地方公演に旅立ち、そして1593年の夏にはロンドンに戻って事実上破産して、離散した。1597年に Francis Langley のマネジメントのもと「白鳥座」(the Swan) を本拠に再編成された同じ名前の劇団は1592～93年の劇団とは全く別個のもので、本論の対象にはならない。

Pembroke's Men に関わる謎は多い。パトロンであるペンブローック伯爵(Earl of Pembroke) が、長い間自らの劇団を持たなかったのに、老後の遅い時期になぜ自らの名を冠した劇団の存在を認めたのか、Pembroke's Men の母体となったのはどの劇団なのか、どんな役者がメンバーだったのか、彗星のように中央に躍り出たきっかけは何だったのか、興味はつきない。シェイクスピアとの接点も一つの鍵である。シェイクスピアは1592～93年の Pembroke's Men の一員だと主張する人もいる。このシナリオによると、シェイクスピアは役者として舞台に立つと同時に Pembroke's Men のために最も初期の作品群を提供していたことになる。後に Lord Chamberlain's Men (以後 LCM) のリーディング・アクターとしてハムレットやオセロを演じたりチャード・バーベッジ (Richard Burbage) がすでにこの時期 Pembroke's Men に在籍していたという説もある。

Pembroke's Men の実体についてはあらゆる分析、研究が行われているが、残念なことに間違ったデータに基づいていたり、根拠のない推論、

個人の希望的仮説の域にとどまっているものが少なくない。データの客観的再検討と最新の研究の成果をもとに、Pembroke's Men とヘンリー 6 世劇の関係を調べ直す必要がある。もしかしたら、「大山鳴動、ネズミ一匹」の結論になるかもしれないが、誤った「神話」(mythos) を定着させないためにも、この作業は急がねばならない。

I

ヘンリー 6 世 3 部作で、はっきり上演された記録が残っているのは、「ヘンリー 6 世・パート 2」(以後 2H6) の Quarto 版 *The First Part of the Contention* ... (1594 年出版:以後 1 Contention) と「ヘンリー 6 世・パート 3」(以後 3H6) の Octavo 版 *The True Tragedy* ... (1595 年出版:以後 *True Tragedy*) の 2 つだけである。1623 年、シェイクスピアの死後出版された全作品集 *the First Folio* に納められた 2H6 と 3H6 は、テキストとしては最も信頼性の高いものであるが、実際に上演された記録はない。事実、フルテキストで上演するには長過ぎるのである。ヘンリー 6 世 3 部作と Pembroke's Men を結ぶ唯一の確証は *True Tragedy* の 1595 年の Q₁ 版(実際にはひとまわり小さい Octavo 版であったが、慣例に従って Folio 版に対して Q の名称を使う)の表紙のタイトルである。

The True Tragedie of Richard Duke of Yorke, and the death
of good King Henrie the Sixt: with the whole contention
betweene the two Houses, Lancaster and Yorke; as it was
sundrie times acted by the Right Honourable the Earle of
Pembroke his servantes...¹

一方、*1 Contention* の表紙には上演した劇団の名前が抜けている。*2H6* と *3H6* が明らかに連作なので、現在のコンセンサスに従って *1 Contention* も Pembroke's Men によって上演されたとみなす。Pembroke's Men とシェイクスピアの接点を多重にするのが、ヘンリー 6 世 3 部作と同時期、あるいは直後に書かれた *Titus Andronicus* (1594) と *The Taming of a Shrew* (1594) (「じゃじゃ馬馴らし」の名で知られている劇とは別) の Q₁ 版に同じように Pembroke's Men の名前が出てくることである。

The Most Lamentable Romaine Tragedie of Titus Andronicus:
As it was Plaide by the Right Honourable the Earle of Derby,
Earle of Pembroke, and Earle of Sussex their Servants...

A Pleasant Conceited Historie, called The taming of a Shrew.
As it was sundry times acted by the Right honorable the Earle
of Pembroke his servants...

Pembroke's Men のレパートリーにシェイクスピアの芝居が少なくとも 4 つあった事実は重い。シェイクスピアと劇団の深い関係が想像される。そして以上の 4 作品の出版が 1594~95 年という短い期間に集中しているのは、Pembroke's Men が 1593 年の夏に破綻した記録と時間的に一致している。劇団の解体、あるいは幹部役者の離脱によって機能不全に陥った劇団の貴重な財産である脚本が市場に流れたのである。*Titus Andronicus* の標題 “the Earl of Derby, Earl of Pembroke[’s servants]” の記述は、Strange's Men (Derby's Men とほとんど同じ意味で用いられていた) から Pembroke's Men へと派生した過程を示唆して興味深い。いずれにせよ、1592~93 年の Pembroke's Men のためにシェイクスピアは積極的に作品を提供していた。時には Strange's Men を経由したこともあった

ろうが。無論 Pembroke's Men のレパートリーはシェイクスピアの作品だけに留まらない。クリストファー・マーローの *Edward II* の Q₁ (1594) の表紙から、この作品が Pembroke's Men によって上演されたことが分かっている。エリザベス朝の劇団は常時20以上の芝居を掛けられる力が要求されたので、ほかに脚本を持っていたはずだが、残念ながらこれまで述べた作品以外に Pembroke's Men が上演した芝居は確認されていない。シェイクスピアの *Richard III*、および最近シェイクスピアの作品の中に数えられるようになった *Edward III* を Pembroke's Men のレパートリーに加える研究者もいるが、確証はない。

II

では、Pembroke's Men という劇団はそもそもどういう劇団だったのか。その出自ははっきりしていない。名の語る通り、パトロンは Henry Herbert, Earl of Pembroke (1534~1601) である。Pembroke's Men の名前が初めて記録に登場するのは1592年10月~12月 Leicester での公演である。時期的には、6月に枢密院のロンドン劇場閉鎖令が出て、疫病発生のためこの禁止令が長期化し、ロンドンの劇団が一斉に地方巡業へ向かった時である。Pembroke's Men の母体である Strange's Men は劇場閉鎖令を受けて、本拠地である薔薇座 (the Rose) で上演を続けられるよう枢密院に7月に嘆願書を提出している。願いは聞き入れられなかったが、嘆願書は、「我々の劇団は大所帯で、従って出費も膨大であり、地方巡業をして劇団を維持することは我々の分離と分割を意味します」と訴えている。² Strange's Men の幹部、そして薔薇座の経営者フィリップ・ヘンズロー (Philip Henslowe) の恐れていた「分離と分割」がまさに現実となったのである。Strange's Men とその分派である Pembroke's Men は疫病が収束する1594年6月まで地方巡業で食いつなぐことを余儀なくされた。この間 Strange's Men と Pembroke's Men は時には別個に、時には合同

で地方都市で活動したようである。Strange's Men／Admiral's Men の実質的リーダーであったエドワード・アレン (Edward Alleyn) も、地方巡業中別行動の Pembroke's Men がどこにいるのか把握できず (また自分たちの日銭を稼ぐのでその余裕もなかった)、ロンドンにいる義父のヘンズローに Pembroke's Men の所在を手紙で尋ねているくらいである。そのアレンの問い合わせに対して、ヘンズローは1593年8月の手紙でこう答えている。「貴方が所在を知りたがったペンブローク団員のことだが、今ロンドンに戻ってこの5～6週間そのまま、聞くところでは旅の出費がかさんで、金を捻出するため衣装を質に入れるつもりということだ。」³

明らかにこの時点で Pembroke's Men は破産して、上記の衣装類、さらには芝居を「質に入れた」か、他の劇団に売却してかろうじて借金を返済したのだろう。これ以降も Pembroke's Men という名の劇団の地方での活動は散発的に見られるが、シェイクスピアやマーローの人気劇をロンドンで上演したと思われる1592～93年のカンパニーとは別物と考えてよい。1597年に興行師フランシス・ラングリーが Pembroke's Men の名の下に集めた役者の集団は、ロンドン劇団の離合集散の点からは興味深いが、シェイクスピアの関係した同じ名前のカンパニーとは何ら共通項がない。

地方巡業に明け暮れた Pembroke's Men にも一瞬の輝きのときがあった。1592～93年の宮廷のクリスマス・新年のエンターテインメントのための宮廷への招聘である。Strange's Men と一緒に招かれた Pembroke's Men は独自に都合2回の上演を許されている。注目すべきはその日付である。一回目の上演は12月26日、つまり St Stephen's Day である。この日はキリストの誕生を祝う宗教的儀式“Christ Mass”が終り、晴れて宴と芝居が解禁される日である。この日に上演を許されることは大きな名誉であり、ロンドン劇団の序列確認の上でも特別な日である。さらに、Pembroke's Men の2回目の上演は1月6日、つまり「十二夜」(Twelfth Night) に行われた。Epiphany Dayとも言われるこの日は、クリスマス・新年の慶事の最後の日として特別な意味を持つ。翌年1593～94年の宮廷

シーズンは、疫病の悪化が災いして、参加したのが Queen's Men のみというとても寂しいものだったが、それでもその一回の公演は1月6日十二夜に行われた。1591～92年度、宮廷に唯一招待され、計6回の上演を許されて完全勝利を果たした Strange's Men と同格で、この重大な2つの日に抜擢された Pembroke's Men とは本当にどんな劇団だったのだろう。この衝撃的デビューにもかかわらず、Pembroke's Men は再び地方に旅立ち、二度と宮廷に戻ってくることはなかった。このときシェイクスピアはこの劇団に参加していたのだろうか。この疑問はとりあえず後に譲る。唯一言えることは、この1592年クリスマスの宮廷デビュー以前に全く実績のない劇団が Strange's Men とダブル・ビルで招聘されたことは、この2つの劇団が実は一つの大所帯の劇団の分離した姿であるという事実によってのみ説明できることである。

もしかしたら意味深い事実がある。1592年8月、ロンドンの疫病を避けてエリザベスはお気に入りの夏の地方巡歴（“Summer Progress”）に出かけ、27日から29日にペンブローック伯爵の屋敷の一つがある Ramsbury を訪れている。⁴ 前述したように、Pembroke's Men の活動が最初に報告されているのは10月以降のレスターでの公演である。それに先立つ8月に Pembroke's Men が存在していないという理由はなく、可能性としてであるが、ラムズベリー訪問時にエリザベスが Pembroke's Men の芝居を余興として見て好印象を受けて、その年のクリスマス・シーズンに宮廷に招くよう指示したというシナリオもあり得る。しかしこれは単なる一つの可能性に過ぎない。

一つ明らかにしなければならないことがある。リチャード・バーベッジが Pembroke's Men にこの時期参加していたかである。リチャードは後の LCM でシェイクスピア同様に劇団の「株主」（“sharer”）であり、二人の関係は舞台を離れても密接であるとさまざまなエピソードから判断されることから、この二人がかなり早い時期から行動をともにしたという先入観がある。基本的にリチャードは父のジェイムズ・バーベッジ、兄のカス

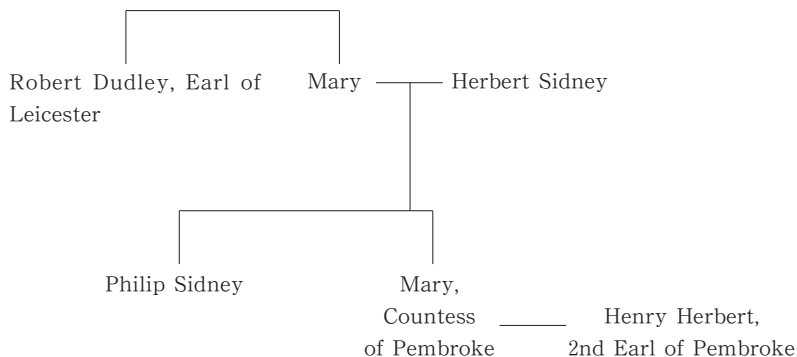
パート (Cuthburt) と行動をともにし、彼らの拠点はジェイムズが1576年にロンドン市外北部の Shoreditch に建てたイギリスで初めての大型商業劇場 the Theatre である。そもそもジェイムズは Leicester's Men の一員で、1588年パトロンのレスター伯爵 Robert Dudley 死後、自らを Lord Hunsdon's Men と名乗っていた。Lord Hunsdon とは後の LCM のパトロン、ヘンリー・ケイリーを指す。1584年6月、the Theatre の周辺で職人を主にした若者による騒動が起こり、風俗上劇場に対して好感を持っていなかった市当局が劇場閉鎖を視野に入れて調査に向かったところ、パーベッジ族はこれに憤慨してあやうく暴力沙汰に及び、その後ジェイムズは書簡で自分はハンスドン卿の下僕であり、彼の庇護下にあると主張して拘束されることを拒否した。⁵ 普通なら市の権威を公にないがしろにすることは当然投獄、裁判の危険をはらむもので、この件でジェイムズにお咎めがなかったことは、事実ハンスドン卿が間接的に彼を庇ったと考えてよいだろう。ジェイムズと彼の息子たちはこの強い政治的後ろ盾を武器に、特定の劇団と契約せず、the Theatre を需要に応じて複数の劇団に提供し、1594年晴れてハンスドン卿が旧 Strange's Men の団員を中心に新しく LCM を興したときこれに参加したと考えられる。リチャードはシェイクスピアと行動をともにしたのではなく、父ジェイムズと行動をともにしたのである。LCM 以前のリチャードの足跡が全く分らないのはひとえに彼が the Theatre から動かなかったからである。Andrew Gurr は、レスター伯の死でロンドン市議会の攻撃から身を守るすべを失ったパーベッジ家が、レスター伯の盟友であるペンブローック伯爵に接近した結果 Pembroke's Men が生まれたというシナリオを描いているが、これはジェイムズ・パーベッジのハンスドン卿に対する長年の忠誠を全く無視している。なぜジェイムズがよりによってペンブローック伯爵を頼ったのか、Gurr は全く理由を提供していない。⁶ 確かにロンドン在中 Pembroke's Men が疫病の発生する以前、前述した芝居を the Theatre で上演したことは可能性として高い。しかしパーベッジ族が Pembroke's Men とそ

のパトロンと特別な関係にあった、ましてやりチャードが役者として加わっていたとするのは根拠のない推測に過ぎない。

Ⅲ

Pembroke's Men のパトロンである第2代ペンブローク伯爵ヘンリー・ハーバートとはどんな人物だったのか。それにはハーバート家の歴史をさかのぼる必要がある。初代ペンブローク伯爵ウィリアム・ハーバート(c 1423-1469)は純粹のウェールズ人でイングランドの貴族になった最初の人である。ハーバートの姓はイングランド名である。このウィリアムがヘンリー6世劇の素材のなかで大きな役割を果たしている。薔薇戦争の最中に活躍したウィリアムは、エドワード4世の命を受けてウェールズのペンブローク城を攻略し、幼少のリッチモンド伯爵ヘンリー・チューダー(後のヘンリー7世)を保護下に置き、妻にヘンリーの養育を委せた。ウィリアムは高額を支払ってヘンリーの後見人の権利を得て、ヘンリーの結婚時に法律上の義父としての地位を獲得した。以後ペンブローク伯爵となり、当時いまだ中央政府の管轄外にあったウェールズの大きな地域で権力を握った。ヘンリー7世の戴冠によるチューダー王朝の時代、ペンブローク家は順当に中央政府との関係を築いていった。ウィリアムの孫は1550年にウェールズ全体を統轄する責任者 Lord President of Wales に任ぜられた。

Pembroke's Men のパトロンのヘンリーは、婚姻関係を通じて宮廷の有力貴族と強い政治的基盤を作り上げた。



特筆すべきはペンブローック伯爵とレスター伯爵およびシドニー家との関係である。レスター伯爵は女王の寵愛の篤い人物で、一時は結婚の話も非現実的ではなかった。レスター伯爵とペンブローック伯爵は互いを父、息子と呼びあうほど近い関係だった。レスター伯は、甥のフィリップ・シドニーとともに、大陸のカトリック勢力に対抗してプロテスタント同盟を築くべく先頭に立った人物で、ペンブローック伯爵もそのサークルの中にいたと考えられる。ハーバート・シドニーも同様レスター伯のサークルの重要な人物で、Lord President of Wales の職務を果たした後、これをペンブローック伯爵が引き継ぐ形になった。この三者を結ぶ強いすがいになったのがフィリップ・シドニーの妹、ペンブローック伯爵夫人メアリーである。イングランドの若き星であったフィリップを兄に持ち、自らもペンをとってドラマや詩を書き、ウィルトンの自宅に文芸サロンを維持した彼女の存在なくしてダドリー／シドニー／ハーバートの政治的ネットワークは語れない。彼女はレスター伯爵に対して自らを「娘」と呼んだ。彼女もまたウェールズに近い Bewdley で生まれ、ペンブローック伯爵ウィリアム・ハーバートが名付け親になった。ダドリー／シドニー／ハーバートの三家の力を物語る材料として、一時彼らの領地、所有地、影響力を持つ土地を合算するとイングランド全土の3分の2に及んだという逸話を紹介しておく。⁷

ペンブローック伯爵は二人の息子がいた。ウィリアムとフィリップである。

二人はそれぞれペンブローック伯爵の地位を引き継ぎ、同時に続けてLord Chamberlain となり、ロンドン演劇界の庇護者、監督者となった。1623年出版のシェイクスピアの the First Folio はこの兄弟に献呈されている。無論ウィリアムとフィリップを選んだのは LCM のシェイクスピアの同僚ヘミングズとコンデルであり、当時ウィリアムが Lord Chamberlain を勤めていたことが選択の最大の理由であろう。しかし、ペンブローック伯爵家とシェイクスピアを結ぶなんらかの絆、記憶がそこに介在しなかったとは言い切れまい。シェイクスピアの「ソネット」の前辞に出版者 Thomas Thorpe が書いたかの有名な “Mr W H” の有力な候補の筆頭がこの William Herbert である。ことの真偽は永遠に分からないだろうが、「ソネット」の “fair youth” がウィリアムをモデルにしたとしたら、シェイクスピアのペンブローック伯爵家とのつながりは我々が思っている以上に濃厚なものだったことになる。

レスター伯爵ロバート・ダドリーはその強力な政治力ゆえ宮廷の他の貴族を磁石のように引きつけた。その中にダービー伯爵ヘンリー・スタンリーがいた。*Dictionary of National Biography* はレスター伯爵の “lifelong friends” の一人としてヘンリー・スタンリー (Strange’s Men のパトロンのファーディナンドの父) をあげているが、詳細については触れていない。1588年レスター伯爵の死で Leicester’s Men が後ろ盾を失って混乱した時期、伯爵の “lifelong friend” であるヘンリー・スタンリー、あるいは父以上に演劇に関心があった息子のファーディナンドが救いの手を差しのべたとしてもおかしくない。加うるに、レスター伯爵サークルの中心にいたペンブローック伯爵とシドニー家に何らかの打診があり、可能性として、長年自分の劇団を持たなかったペンブローック伯爵が亡き盟友のために自らの名を新しい劇団に貸すことに同意したのかもしれない。ロンドン劇団の大きな再編成は1594年の LCM と Admiral’s Men によるいわゆる “duopoly” (Andrew Gurr の言葉) とともにやってくるが、それまでの過渡期の役者の動きと劇団の分裂、統合のプロセスに、何らかの形でレス

ター伯爵グループによる画策、介入があったことは想像するに難くない。最もありうるシナリオとして、まず Strange's Men が Leicester's Men の一部を吸収し(事実 Brian, Pope, Kemp らはそう移動したことが分かっている)、さらに大所帯となった Strange's Men から生まれた新しい劇団がペンブローック伯爵の許可を得て“Earl of Pembroke his servants”と名乗ってロンドン、あるいは地方巡業で一步を踏み出したのだろう。

ここで問題になるのがペンブローック伯爵夫人メアリーの果たした役割である。夫のヘンリーは演劇を含め芸術には疎いタイプの人で、その彼の代わりに妻メアリーを Pembroke's Men の事実上のパトロネスであるとする議論が一部で盛んである。結論から言うと、この仮説には無理がある。メアリーはウィルトンの自宅に多くの芸術家を集め、サミュエル・ダニエルなど多くの詩人を庇護し、金銭的にも彼らを支えたようである。彼女自身詩に加えてドラマにも手を染め、ローマの古典悲劇をモデルに *Antonius* を書いた。しかし彼女の書いたドラマはモデルとしたセネカの作品と同じように、一般の舞台上演されることを目的としない、いわゆる“closet play”であり、メアリーは親しい友人たちと自作の *Antonius* を自宅で朗読するだけで満足だったはずである。彼女のウィルトンのサロンに役者も出入りしたという噂もあるが、裏づけになる証拠はない。兄のフィリップ・シドニーは役者を愛し、当時 Leicester's Men の道化であった Richard Tarlton の息子の名づけ親になっている。また彼女の息子のウィリアムは劇場好きで有名で、自らもロンドン劇場を視野に芝居を書き、リチャード・バーベッジの死のおりは、彼を“old acquaintance”と呼んで希有な才能が鬼籍に入ったことを嘆いた。一方、彼女が観劇にロンドンに出かけたという記録はなく、彼女と“common players”の接点はほとんど見当たらない。

唯一それがあるとしたら、1592年8月の Simon Jewell という役者の遺書である。この遺書の中で、仲間の団員に金銭や形見となる品(“all my playing things in a box”)を残した後、サイモン・ジュエルはこう述

べる。“Item my share of such money as shall be given by my lady Pembroke or by her means I will shall be distributed and paid towards my burial and other charges...”⁸ つまりジュエルは自分の埋葬費などは、ペンブローック伯爵夫人から支払いが期待される金額でまかってくれと言っているのである。この文面を見る限り、ジュエルの属していた劇団は Pembroke’s Men であり、ペンブローック伯爵夫人がパトロンネスであるかのような印象を与える。しかし現在の定説は⁹、遺書に言及されている役者の顔ぶれから判断して、ジュエルの劇団は分裂したばかりの Queen’s Men であり、ジュエルは Queen’s Men の一員としてペンブローック伯爵夫人の邸宅で芝居を披露した際の未支払いの報酬の自分の分(“my share”)を要求しているのだという解釈である。この遺書に登場する役者を中心に Pembroke’s Men のメンバーを再構成しようとする試みは大前提に誤りがある。そうして再構築されたメンバーの顔ぶれと、*1 Contention* や *True Tragedy* 中のヒントから導きだされた Pembroke’s Men のメンバーが全く重ならないのは至極当然なのである。

IV

1592～93年の Pembroke’s Men のメンバーを特定することはできるだろうか。残念ながら直接名指しで Pembroke’s Men の団員をあげている資料はない。しかしこの特定の作業が全く不可能でもない。エリザベス朝の劇のテキストの中で、事故や間違いで役者の名前がキャラクターの名前と取り違えられてしまった例がある。シェイクスピアの場合 Q 版に多いが、F₁ (*the First Folio*) でもそれが起っている。例えば、*Much Ado about Nothing* Q 版の 4 幕 2 場、Dogberry の台詞をしゃべる人の名前が “Kemp” と現れている箇所がある。これは明らかに LCM に当時在籍し、道化役を得意とした Will Kemp が Dogberry を演じたことを示している。Kemp は 1594 年 LCM 創設時からのメンバーで、少なくとも *Much*

Ado about Nothing が上演されたとき LCM に在籍していた証拠となる。しかしこの種の情報の解釈には危険も伴う。召使いや下僕の “Sampson” “Gregory” “Will” “Dick” “Peter” などよくある名前は、一般の普通にある呼び名として作家が選んだと考えるのが大きな前提である。作家やブック・キーパーあるいは作家の原稿を清書した写筆者が、特定の役者をイメージして、間違って書いた個人名がまぎれこんでいる事例はまれで、安易に役者の名前をテキストに見つけようとするには慎重であるべきである。その警告を念頭に置いて、*1 Contention* と *True Tragedy* そして *2H6* と *3H6* のテキストから Pembroke’s Men のメンバーを再構築できないか試みたい。

その作業の前に、一つクリアしなければならない誤解がある。1590年代初期、特に Strange’s Men のメンバーを再構築するのに長らく基本的資料として使われた芝居に *The Second Part of the Seven Deadly Sins* がある。これは実は「芝居」ではない。いわゆる “plot” と呼ばれるエリザベス朝舞台に特殊な道具で、一枚の木の板に芝居の簡単な筋書きと役者の出入りを指示した紙を貼りつけたもので、舞台裏の壁に上演時に掛けられ、役者たちはこれを見て舞台の進行と自分の出番を確認した。このプロットは1590年あるいは1591年 Strange’s Men、あるいは Admiral’s Men と合同した Strange’s Men の上演時の記録であるとされてきた。*Seven Deadly Sins* が重要な意味を持つのは、多くの役者の名前、特にリチャード・バーベッジの名がこの早い時期に見られるからである。このプロットに現れる役者の名前は次のごとくである。

Mr Brian (Robert Brian)

Mr Phillipps (Augustine Phillips)

Mr Pope (Thomas Pope)

R. Burbadg (Richard Burbage)

Harry (Henry Condell?)

W. Sly (William Sly)
R. Cowley (Richard Cowley)
John Duke
Ro. Pallant (Robert Pallant)
John Sincler
Kit (Christopher Beetson?)
Tho. Goodale (Thomas Goodale)
J. Holland (John Holland)
Vincent (Thomas Vincent?)
T. Belt
Saunder (Alexander Cooke?)
Nick (Nicholas Tooley?)
Ro. Go. (Robert Gough?)
Ned
Will

() 内の名前は他に記録に残っている役者のもので、？がついているものは候補として名前があがっている意味である。もし *Seven Deadly Sins* の上演が1590年だとすると、バーベッジは弱冠22歳である。そして彼が、後に LCM で一緒になる Brian, Phillips, Cowley, Sly などとこの早い時期にすでに活動していたことになる。1594年以前のリチャード・バーベッジの軌跡が全く分からないので、この資料の価値は量りがたい。この役者の名前をもとに、1590年代の Strange's Men および Pembroke's Men の団員の構成を再構築しようとする試みが多数なされ、*Seven Deadly Sins* のプロットはその貴重な出発点となった。名前のリストの最後に現れる “Will” が誰だと推測されたかは言うに及ばず。

David Kathman の “Reconsidering *The Seven Deadly Sins*” が2004年に発表されるまでは。¹⁰ Kathman はプロットにあげられている役者の

名前を綿密にゼロから検証し直し、プロットの出自とその後の歴史についても詳細なリサーチをした。論議の細部は省くが、はっきりとアイデンティティーの確立している役者 (Burbage, Pope, Cowley, Phillips, Sly, etc.) だけでなく、のち LCM / King's Men に在籍した役者 (Pallant, Beetson, Goodale, Holland, etc.) が1591年に同一劇団で活動することは事実上不可能であることを Kathman は証明してみせた。Kathman の結論は、*Seven Deadly Sins* のプロットは1597～98年の LCM に属するというものである。この時期確かに *Seven Deadly Sins* に現れる役者は全員が LCM で活動していたことは他の資料が支持している。パーベッジの名前がポーブやフィリップスと並んでいるのは当たり前なのである。*Seven Deadly Sins* の中世劇の伝統を受け継いだ道徳劇のスタイルやドラマツルギーが、そんなに遅い時期に演じられたはずがないという先入観を我々に抱かせていたのである。反対に言えば、「七つの大罪」の登場する道徳劇が1590年代後半でもロンドンの観客に人気があったことを物語っている。

いずれにせよ、Strange's Men あるいは Pembroke's Men の構成員を再構築する試みは *Seven Deadly Sins* を無視するか、あるいは Kathman の分析を覆すに足る反論を行わなくてはならない。しかし現状はその通りになっていない。いまだに *Seven Deadly Sins* を根拠にして1590年の劇団構成を論ずる傾向は残念ながらまだ続いている。Kathman の論文が *Early Theatre* という比較的歴史の浅い、マイナーなジャーナルに掲載されたことが Kathman の研究成果の認知を不幸にも遅らせたと言わざるを得ない。将来 *Seven Deadly Sins* を資料として使う研究者は、Kathman の結論になんらかの姿勢を打ち出さなくてはならない。

前置きはこのくらいにして本論に戻りたい。そもそも、役者の名前がキャラクター名の代わりに現れる傾向は一般的にドラマティストの手書き原稿より、ブックキーパーの作った舞台台本 (promptbook) のほうが強いと言われている。¹¹ 従って、*1 Contention* や *True Tragedy* のように、「舞台

裏から生まれた」テキストにそれが起きやすいと言えるだろう。

“Bevis”

2H6の2幕3場、徒弟と親方の「決闘」の場面で、親方が“Peter, have at thee with a downright blow”と叫んで打ちかかる。1 *Contention* ではそれに続いて、“as Bevys of Southampton fell upon Askapart” という台詞がつけ加えられている。これは中世の大衆ロマンス *Sir Bevis of Hampton* のなかで主人公の騎士 Sir Bevis が Askapart という竜を退治するエピソードに基づいている。これは明らかに親方ホーナーを演じた役者のジョークがテキストにそのまま残されたと考えてよい。この Bevis の登場がこの箇所に残まるならそれ以上の前進はないが、2H6 4幕2場、最初に舞台に登場するジャック・ケイドの手下の二人は“Bevis and John Holland”である。ただし1 *Contention* では“George and Nick”に変わっている。John Holland は後の LCM の役者であるので、この“Bevis”も役者の名前と考えられ、従って1 *Contention* の Bevis は親方ホーナーを演じた役者の名前であることが分かる。1 *Contention* を記憶に基づいて再構築したのが Pembroke’s Men の旧メンバーであったことも後押しをして、この Bevis がメンバーの候補として浮かび上がる。ことによると“as Bevys of Southampton fell upon Askapart”の一行をテキストに挿入したのも Bevis 本人であるかもしれない。Q 版でも F₁ 版でも Bevis の名前が現れるということは、Bevis が F₁ の底本を所有していた Strange’s Men を経由して Pembroke’s Men に移動した可能性も示唆している。

John Holland

John Holland については次のことが分かっている。

- (1) 上記の2H6のSD (stage direction) の“Bevis and John Holland”。
- (2) *John of Bordeaux* (1592年初演?), あるいは*Huon of Bordeaux* (1593年Sussex’s Menによって薔薇座で上演) の中のSDに, “Enter

John Holland with a letter” “Enter John Holland [as a disguised devil]” とある。1592年の時点で John Holland は Strange’s Men に在籍した可能性がある。*John / Huon of Bordeaux* を1593年に薔薇座で上演した Sussex’s Men は同時にシェイクスピアの *Titus Andronicus* も上演している。*Titus Andronicus* の Q₁ 版の表紙には Strange’s Men, Pembroke’s Men, Sussex’s Men によって演じられたとあるので、*John / Huon of Bordeaux* も同じ道をたどったかもしれない。

(3) *Seven Deadly Sins* に彼の名前がある。

(4) LCM のメンバー Thomas Pope の1603年の遺書に “... the said dwelling house, wherein John Holand now dwelleth” という一行が見られる。

以上の情報から、John Holland は少なくとも *2H6* の上演に参加したが、*1 Contention* に彼への言及がないことから、彼が Pembroke’s Men のメンバーであったとする最後の決め手がない。Pembroke’s Men の上演に参加したが、“Bevis” のような資料上の幸運が彼には訪れなかったということかもしれない。それでも、Bevis 同様 Strange’s Men を経て Pembroke’s Men へ移籍した可能性は残る。*Seven Deadly Sins*、および Pope の遺書が物語るように、少なくとも1597～98年には LCM の役者であり、幹部の Pope とも個人的面識があった。

“Nick”

“Nick” (Nicholas) に関しては次のことが推測を含めて鍵となろう。

(1) “Bevis” の項の *1 Contention* の “Nick and George”

(2) *The Taming of the Shrew* (F₁) の3幕1場 SD に “Enter a servant Nick” とある。

(3) *Seven Deadly Sins* に “Nick” の記述がある。

(4) 1601年 Admiral’s Men のメンバーとしてエリザベスの前で曲芸を披露した役者が “Nycke” と呼ばれている。

(5) Nicholas Tooley (? ~ 1623)の名字が F₁ の King's Men の役者のリストに見える。多分パーベッジの見習い (apprentice) だったと考えられている。

Nicholas という名は珍しくないで、上記 (1) ~ (5) の “Nick” が同一人物であったという保証は全くない。(1)(2)は役者の名前ではなく、キャラクターの名前である可能性のほうが強い。(4)は多分別人であろう。(3)(5)が仮に同一人物だとしても、“Nick” と Pembroke's Men の接点は見えてこない。

John Sinklo (or Sincler)

(1) 3H6 3 幕 1 場、スコットランドから密かに帰還したヘンリー 6 世を捕える森番の名字が “Sinklo and Humphrey” とある。Q₁ では単に “keepers” となっている。

(2) *The Taming of the Shrew* の前芝居 (Induction) に登場する役者が “Sinklo” と呼ばれている。

(3) シェイクスピアの *Henry IV part 2* (1600Q) に Beadle として登場。彼をめぐって痩せていることのジョークが繰り返されるので、体軀の細い役者だったと思われる。E K Chambers は彼を1594年 LCM 創設以来のメンバーとしている。

(4) *Seven Deadly Sins* に John Sincler の名字が見える。

(5) Marston の *Malcontent* (1604) の前芝居に登場。

(1) が Q₁ ではなく、F₁ であることは、Sinklo が森番を演じたのは1597 ~ 98年頃の LCM によるヘンリー 6 世 3 部作再演時だった可能性がある。ただこのヘンリー 6 世再演が実際にあったのか不確かなので、これはあくまで可能性に留まる。(2)~(5) はすべて John Sinklo が LCM の長い間のメンバーであることを示している。彼が肝心の Pembroke's Men に在籍したかは微妙である。一つの可能性として、3H6 の森番を演じたのが LCM の再演時ではなく、1 *Contention* 以前、つまり Pembroke's

Men の親劇団であるStrange's MenがF1の底本となるテキストを保持していた1592年以前のロンドン上演時に“Sinklo & Humphrey”のSDが加えられた可能性がある。するとSinkloはPembroke's Menより、むしろStrange's Men / LCM との結びつきが深いと言わなければならない。

Humphrey Jeffers

- (1) 3H6でSinkloと一緒に森番として名前があがっている。
- (2) 1597年10月Pembroke's MenがAdmiral's Menと合体したときAdmiral'sに参加。1597～1602年Admiral's Menの株主。E K ChambersはAdmiral's Menに加わる前にLCMにいた可能性を指摘している。
- (3) 1600年に出版されたAdmiral's Menの*Look about You*という芝居で召使いがHumphreyと呼ばれている。

Seven Deadly Sins に彼の名前がないことから、Humphrey JeffersをLCM、ましてやPembroke's Menと結びつける材料は全くない。1592～93年のPembroke's Menと1597年の白鳥座の同名の劇団とは一切の連続性がないので、(2)は参考にならない。唯一、“Sinklo and Humphrey”という3H6のSDから、Sinklo同様Strange's Menに一時期参加した可能性は浮かんでくるが、その後Pembroke's Menに移ったという形跡はない。

Gabriel Spencer

- (1) 3H6 1幕2場のSDに“Gabriel” (Q₁ Messenger)の名前が見える。
- (2) 上記(2)のPembroke's MenにG. Spencerの名前が見える。Humphrey Jeffersと行動をともしたと見られる。
- (3) 1598年Gabriel Spencerと言う役者が喧嘩のすえ、劇作家兼役者のベン・ジョンソンに刺殺される。ヘンズローは書簡で単に“Gabriel”と言っていることから、当時彼はヘンズローのマネジメントのもとに活動していたAdmiral's Menのメンバーだったと考えられている。

(1) の“Gabriel”という名前が役者の名前かキャラクターの名前か微妙なところ。仮に役者の名前だったとしても、1592～93年の Pembroke’s Men との接点は、行動をともにした Humphrey Jeffers 同様、見あたらない。(1) をその接点とするのは、Gabriel というごく普通の名だけに頼っており、即 Gabriel Spencer と結びつけるのは冒険である。しかも、Pembroke’s Men の上演した Q_1 では単に “Messenger” となっている。

Saunders (Sander)

(1) *2H6* 2 幕 1 場の「盲人開眼の奇跡」の主人公の名前が Saunders Simpcox。一方 *1 Contention* では Sander。

(2) *The Taming of a Shrew* (Pembroke’s Men のレパートリーの芝居) 中のキャラクターが Sander (or Saunders/Saunders) と呼ばれている。

(a) シェイクスピアの *The Taming of the Shrew* の Grumio にあたる clown の名前が Sander。これはキャラクター名と考えるのが自然か。

(b) 前芝居 (induction) の players の一人の名前の省略形が “San”。 F_1 の *the Shrew* では “Sincklo”。

(a) (b) を突き合わせると、Sander は clown と player を演じた役者の可能性が生まれる。Sander を Alexander Cooke と考える説がある。Cooke は1600年代のベン・ジョンソンのいくつかの芝居の役者リストに名前が現れ、かつ F_1 にも King’s Men として名前が載っており、多分ヘミングズの見習いだったと思われる。

(3) *Seven Deadly Sins* に Saunders の名前がある。

Seven Deadly Sins で Saunders は重要な女性役を演じている。Alexander Cooke が特に女形として舞台に立ったという記録はないが、*Seven Deadly Sins* の Saunders が若き Alexander Cooke であったと仮定することはさして無理がない。彼がヘミングズの見習いであったことも年齢的に合致する。残念ながら Alexander Cooke の生まれた年は分からな

い。(2)の(b)で Sander が舞台から一度退場し、奥方役を演じる“Boy”として再び登場すると仮定すれば、この役者が未成年の、声変わりする前の Alexander Cooke である可能性が生まれる。

妥当な結論として、(1)の Saunder (Simpcox) をキャラクター名として除外することを提案したい。二人の Alexander を考える頭の痛い問題から解放され、一人 Alexander Cooke を念頭に置けばすべては解決する。このシナリオによれば、1592年～97年に女役を演じた Cooke が成人してヘミングズから晴れて独立し、1600年代に King's Men の一員としてベン・ジョンソンの一連の芝居を演じたのである。

以上のデータから1592～93年の Pembroke's Men のメンバーを推測するところなる。

Bevis

John Holland

Alexander Cooke

他の研究者の同様のリストと較べると寂しい限りであるが、*1 Contention* と *True Tragedy* およびその F₁ 版の *2H6*、*3H6* に偶然現れたと判断できる役者の名前に資料をしぼった場合なので、信憑性はかなり高い。“Bevis and John Holland”という *2H6* の SD から推測すると、Bevis は *1 Contention* の上演に親方ホーナーとして出演し、1592年以前のロンドンにおける Strange's Men による *2H6* の上演には二人がジャック・ケイドの手下を演じたと考えられる。つまり、Bevis と Holland は Strange's Men を経由して Pembroke's Men に移ったのではないか。ただ Holland に関してはその事実が *1 Contention* のテキストのみでは証明できないということである。Alexander Cooke の場合はヘンリー 6 世劇より、*The Taming of a Shrew* に鍵がある。シェイクスピアの *The*

Taming of the Shrew の Grumio は主人公 Petruchio のお気に入りの下男で、才気立ち、かなりあけすけにものを言い、観客に直接語りかけるような、*The Two Gentlemen of Verona* の Speed, *The Merchant of Venice* の Launcelot Gobbo の系図に属する “clown” 役である。F₁ 版では痩せているのが「売り」の Sinklo が Grumio を演じている。こうした滑稽み、軽さを演じるのに、*Seven Deadly Sins* で女性役を演じた未成年で、体軀も “Boy” であったろう Cooke は配役として面白い。ハムレットが辛辣に批判した Children of Paul’s などの子供劇団が社会風刺劇で人気を博したのと似た効果をもたらしたのではないかと想像される。

V

前述したように、1592～93年の Pembroke’s Men は1592年のクリスマス・シーズンを除いてすべての活動を地方巡業で過ごした。無論1592年にロンドンの商業劇場で一時活動したことを除外するものではなく、これについては後に述べる。では、*1 Contention* と *True Tragedy* の上演はこの地方巡業中に行われたのだろうか。*1 Contention* と *True Tragedy* を、地方巡業のための 2H6 と 3H6 の縮小版とする解釈も存在する。確かに Strange’s Men／Admiral’s Men から分離した Pembroke’s Men は比較的小所帯であったかも知れない。そのサイズにあうように 2H6 と 3H6 は書き換えられたのだろうか。この疑問に答えるにはエリザベス朝の劇団の地方巡業の実態を把握する必要がある。

まず我々の想像する「地方公演」のイメージを修正しなくてはならない。ロンドンで商業劇場が誕生し、劇団が劇場オーナーと契約して長期にわたって一所に居座ってレパートリー制の公演を行う以前、役者たちにとって「地方巡業」はオプションではなく、唯一の活動の形態であった。ほとんどの劇団が地方から生まれ、イングランド南部、中部を中心に旅をし、地方の有力貴族の邸宅、市町村のギルド・ホールや公会堂、最悪の場合は

露天で一日、もしくは二日の上演を行い、市長から報酬を得て生計を立てていたのである。1580年代から the Theatre を始めとするロンドンの常設小屋に本拠を構えるようになった有力劇団も、疫病で劇場が閉鎖されたときは地方に旅することを強いられ、時には暑い夏の間決まって地方に出かける劇団もあった。

薔薇座に腰を据えていたとき、アドミラルズメンはほとんど毎夏地方に出かけていた。夏の間長くて3ヶ月の間巡業に出かけるのを楽しんだようである。三つか四つの芝居を持って、立ち寄ったところで一つの芝居を一度上演することは、ロンドンのレパトリー制の大忙しの出し物変更に較べたら、休日といってもおかしくなかった。たいてい西と南へ向かうのが普通だったが、ときにはコヴェントリーやレスターまで北に足を延ばすこともあった。水路を使うこともしばしばだった。道具類の荷に加えて、子供たちやスタッフを引き連れての旅は、荷車や馬に頼るより舟を使ったほうが楽に、多分安上がりで行動できたろう。夏はほとんどの富裕階級がロンドンを離れて田舎の邸宅に避難した。疫病を逃がれるためのときもあれば、宮廷や裁判所がお休みだからという場合もあった。¹²

これは Admiral's Men のような大所帯の、経営的にも順調な劇団の場合である。もっと小さな劇団、とくに疫病のためにロンドンを事実上追い出された場合、状況はこれほど牧歌的ではなかったはずである。

巡業の意味するもの、それは荷車や馬のあとを歩くこと、背中に荷物と楽器を背負い、ときには仲間とはぐれることである。時には町に夜遅く着くこともあった。市長の上演許可を得なくてはならない、舞台を設置しなくてはいけない、町を歩いて役者が来た

ことを知らせなくてはいけない。結局それでも一日のあがり
が1ペンスのことだってある。芸人はさておき、役者が嫌いな市
長に上演を拒否されることもあった。¹³

これが地方を巡業する旅役者の実態に近いだろう。限られた団員数で、
限られた衣裳や大道具・小道具を牛に引かせ、ロンドンの劇場でのレパー
トリーを小さな町の集会場や市庁舎で再現するのは不可能である。何らか
の舞台の縮小、削減が必要である。それはテキストにまで及んだのだろうか。
つい最近までは旅の劇団はそうしたという観測が一般的だった。しか
しさまざまな視点からの議論の結果、地方巡業のために必ずしも脚本を短
縮することはなかったという意見が支配的になっている。まず第一に、役
者の立場から見て、今までロンドンで上演していた自分の覚えた台詞を突
然カットされるというのは非常にやりにくい。“Part”と呼ばれる個人の
台詞を書いた紙によってのみ芝居全体を把握している役者にとって、例え
ば2H6を1 Contention に変えるということは、ほとんど新作の劇を覚
え直すのと同じ苦労を強いる。いや、驚異的な記憶力を誇ったエリザベス
朝の役者にとって、新作を覚えるほうがよほど楽であろう。彼らが一番い
やがるのは、すでに覚えた台詞、それをしゃべるキュー、入退場のタイミ
ングなどに突然に変更を加えられることであろう。

次に、劇団員の数である。一般的に言って、エリザベス朝の平均的劇
団の役者の規模は10~16人程度であるというのが今日のおおよそのコン
センサスである。¹⁴ 例えば、エリザベス朝の劇団のサイズの基準を作った
Queen's Men の場合、大人の役者12人程度、これに女性を演じられる3
人ほどの子供が加わる。この数字には舞台の進行を支えるスタッフは含
まれていない。以後プロの劇団の規模は徐々に増大し、Admiral's Men
やStrange's Men のような大所帯の劇団では20人程度と予想される。
LCM/King's Men は16人前後の役者をずっと維持し続けた。地方に旅
に出かけるとき、劇団は規模を縮小したのだろうか。そもそもロンドンの

劇団は自らを維持するのにどのくらいの収入を必要としたのだろうか。例を1591～92年に薔薇座で長期公演を行った Strange's Men の一日の木戸銭を調べてみよう。薔薇座のオーナーでありマネージャーであったヘンズローの克明な記録が残っている。観客の極端に少ない日で7シリング (Senobia という芝居で、直後にレパートリーから消えた)、新作で客の大入りのとき、例えばヘンリー 6 世パート 1 とおぼしき “ne Harey the vi” (neは “new” の意味) の場合 3 ポンド16シリングを稼いでいる。平均して、一日30～40シリング (1.5ポンド～2ポンド) の収入があれば薔薇座の賃貸料、管理費など経費を差し引いて劇団を維持できる利益をあげられるということになる。

他方、地方に出た劇団は一回の公演でどのくらいの報酬を得ていたのだろうか。1592年に疫病による劇場閉鎖を受けて地方に旅した Strange's Men を例にとる。以下、訪れた町と、受け取った報酬を記す。金額はシリングで、端数は切り捨ててある。¹⁵

Canterbury 30	Cambridge 20	Oxford 6	Coventry 20
Gloucester 10	Maidstone 20	Bath 16	Coventry 20
Sudbury 3	Leicester 5	Shrewsbury 40	

無論地方貴族の邸宅で上演すれば、食費と宿泊費の心配はしないですが、金銭的報酬は必ずしも気前がよかった訳ではない。上記の数字からして、地方で一週間に2～3回ほど上演の機会があったとしても、とてもロンドンのプロの劇団が自らを維持できる額には届かない。地方を回るには思い切った劇団員、スタッフのカットが必要である。¹⁶ 地方巡業の劇団の規模は役者の数10人程度と思われる。¹⁷ 無論小劇団、地方の劇団の人数はもっと少なかったろう。「ハムレット」の旅役者は最低4人で演じられる。

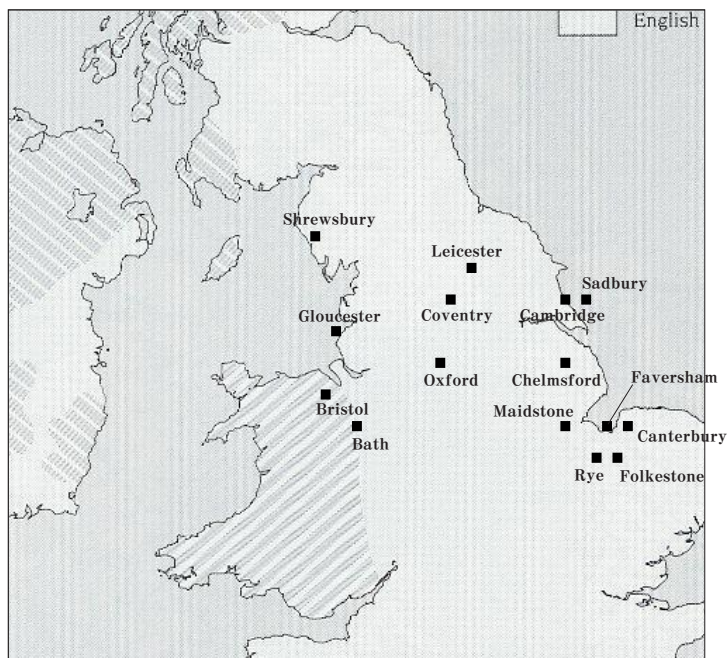
少ない人数で手持ちの芝居を地方で掛けるということは台本をかなり短く、簡素化することが予想される。しかしそれが行われた形跡は見あたら

ない。前述したように、むしろロンドンの芝居をそのまま持っていったとするのが現在のコンセンサスに成りつつある。¹⁸ 先ほど言及した役者にとっての不便もある。さらに芝居を書き換えるということは the Master of the Revels から新しい許可書を得ることを意味し、それには出費と時間と書類の煩瑣な手続きが必要で、劇団幹部が喜んでそれをしたとは思えない。従って、規模を縮小した劇団で、ロンドンで上演した長さの芝居を地方で演じたという奇妙な、矛盾する仮説が生まれてしまう。この問題はロンドンの芝居をそのまま地方に持っていったと考えるから起るので、何らかのダイジェスト化したものを上演したと考えるほうが現実的だろう。一つの、あるいは二つ以上の芝居の独立した場面を抜き出したものを選んで上演し、エリザベス朝につきものの音楽つきのコミカルな踊り“Jig”や道化のスタンドアップ・コメディアン的パフォーマンス、あるいは曲芸や手品の類いでエンターテインメントに飢えた地方の観客は十分に満足したのではないか。無論地方貴族の邸宅のホールでの上演は例外だろうが。

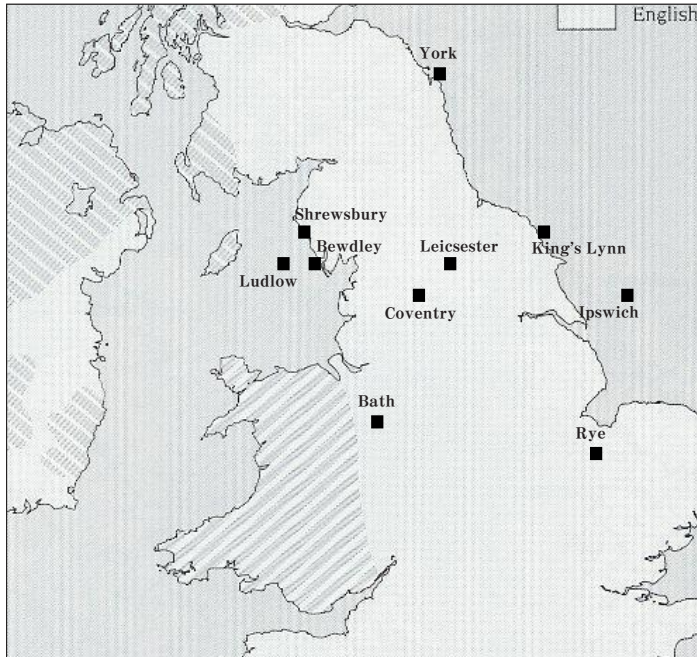
Pembroke's Men のレパートリーの *1 Contention* と *True Tragedy* をノーカットで、ロンドンよりずっと少ない団員で上演するのは不可能である。台本が長過ぎるし、必要なキャストの数が途方もなく大きいのである。ある試算では、*1 Contention* をフルに上演するには24名以上の子供を含めた役者が必要である。¹⁹ これは一人の役者が複数の役を演じるダブリングをしたと仮定した上での話である。*True Tragedy* は22人の役者が必要である。これは旅に出た劇団の能力をはるかに超えている。*2H6*、*3H6* よりだいぶ短くなったとはいえ、*1 Contention* は2,233行、*True Tragedy* は2,114行ある。1590年前半の芝居の平均的な長さが2,000行程度とすれば、シェイクスピアはかなり長い芝居を書いたのである。シェイクスピアの手書き原稿をもとにしたとされる *2H6* は3,466行、*3H6* は3,246行ある。おそらく、*1 Contention* と *True Tragedy* の長さがロンドンの実際の上演の現実を反映しているだろう。この二つの芝居がそのままの形で地方で演じられた、ましてやデビューしたとするのは紙の上での議論でしかない。

このことは、*1 Contention* を舞台にかけた際の技術的問題を直視すればすぐに納得できる。Montgomeryも指摘しているように²⁰、*1 Contention* 上演には悪魔が現れ消える「奈落」(trap door)、死体が発見されるカーテンで隠された舞台奥のスペース、エレノーが現れるバルコニーなどが必要である。この事実は*1 Contention* のテキストが、ロンドンの劇場で行われた*2H6*の縮小版のプロダクションを再現していることを意味する。Pembroke's Men が使うことのできた劇場は特定できないが、候補として the Theatre, その近くにある the Curtain, テムズ川南の Newington Butts があげられる。ロンドン市内の宿 the Cross Keys の中庭も除外できない。いずれにせよ、*1 Contention* も *True Tragedy* も、地方都市でその全体像が日の目を見ることはなかったはずである。

Strange's Men の地方巡業：1592～93



Pembroke's Men の地方巡業：1592～93



1592～93年の Strange's Men と Pembroke's Men の地方巡業を地図で再現すると次のようになる。²¹

現在各市町村の記録に残っているものだけなので、これ以外にも両劇団が訪れた町はあるはずである。同じ町で Strange's Men と Pembroke's Men が報酬を受けとっているケースが複数あることから、二つの劇団は時に行動をとみにしたと考えられる。時間の流れで言うと、まずイングランド東南部を回ったらしい。この地帯はロンドンと近く、しかも平地で交通の便がよく（テムズ川沿いに海路を用いることも可能）、伝統的に役者を受け入れることが確実な町が多かった。町の中には役者を追い払うためなにがしの金を払ったところも少なくない。イングランド中央部（Midland）のレスターやコヴェントリーは中世の時代から演劇に理解が

あり、必ず旅の劇団が立ち寄る町であった。

目を引くのは、地図には現れていないが、道が整理されておらず、山岳地帯に入るウェールズ、およびイングランドのウェールズに接している地方の町である。Strange's Men はこの地域に足を踏み込んでいるが、シュルーズベリーしか訪れた形跡がない。シュルーズベリーは劇場があったことで知られており、この地域に入る役者たちにとって魅力的な町である。一方 Pembroke's Men はラドローとビュードリーも訪れている。ラドローはウェールズの大きな町で、伝統的に Lord President of Wales の居城があった。ウェールズ全体を統轄する Council of the Marches of Wales の開かれる場所でもあった。Lord President of Wales として、ペンブローック伯爵ヘンリー・ハーバートも晩年はここで時間を過ごすことが多かった。そもそもハーバート家の祖先はウェールズ人なのである。故郷の自宅ではヘンリーはウェールズ語で会話していたとも言われている。ラドローを Pembroke's Men が訪れた際の家事記録には次の記載がある。“Item to My Lord Presidentes [Pembroke's] players a quart of whit wine & suger in the new howse xiid.” 砂糖入りの白ワイン (sugar が菓子類でなかったら) 12ペンス分を頂戴したということである。“The new house” はもてなしを受けた場所なのか、芝居を披露した場所なのか定かではないが、文脈から推して前者であろう。1589年か1590年に Queen's Men がラドローを訪れた時、“Item to the Queen's majestie players 10s, Item unto them a gift of whyte wyne and Sugar at there departinge” という記述があるので、白ワインで役者をもてなすのはこの城の慣習だったのだろう。Queen's Men が10シリングの報酬を受けとっているのに、Pembroke's Men には報酬の額が記されていないのは、記入を失念したのか。そのときペンブローック伯爵は在宅だったのだろうか。これは想像に任せるしかない。

さらに Pembroke's Men はビュードリーにも足を運んでいる。ビュードリーと言えば、ペンブローック伯爵夫人メアリーの生誕地で、彼女が幼少

の時代を過ごした土地である。夫とともにウェールズのラドローで多くの時間を過ごしたメアリーもビュードリーに足を延ばすことがあったかもしれない。Pembroke's Men 訪問時の家事記録は次のように書かれている。“Paid to my Lord President his players xxs.” 20シリングという金額は、他の町で支払われた金額と較べて、かなりの好待遇と考えてよい。「女王陛下の僕」Queen's Men の当時の報酬が20シリングが相場だったことを考えればそのことの裏づけとなる。Pembroke's Men はシュルーズベリーも訪れているが、ここでもカンパニーの名前は“My Lord President's players”で、この一帯でPembroke's Men がヘンリー・ハーバートの“livery”（家来であることを示す衣裳、はっぴ）を身につけた集団として認知され、それにふさわしい待遇を受けたことが分かる。

Strange's Men と Pembroke's Men の地方の旅の足跡をたどって印象的なのは、二つの劇団の“home”の感覚の違いである。Strange's Men はストレンジ卿ファーディナンドの“livery”を印に地方の自治体に受け入れられたとはいえ、ランカシャーの主の邸宅のある Lathom や Knowsley に足を延ばしていない。確かにランカシャーは遠地であるが、それ以上に、自分たちはロンドンの劇団で、ロンドンが活動の拠点であると考えている役者がほとんどだっただろう。家も家族もロンドンに持つ役者が少なくなかったと想像される。彼らはスタンリー家のランカシャーを“home”と感ずることはなく、完全に都市型の劇団に変身している。いっぽう Pembroke's Men は明らかにパトロンを頼り、パトロンの故郷であるウェールズ、もしくはその周辺地を“home”とする感覚が多少はあったようである。これは Strange's Men のように、薔薇座を本拠地としてロングランの興行を行った実績が Pembroke's Men にはなかったからだと考えられる。彼らの旅路を眺めると、不慣れな地方巡業で徐々に疲弊していく劇団がやっとの思いでパトロンの居住する場所にたどり着いてしばしの安楽を得て、仲間の Strange's Men と連絡がとれなくなり、1593年夏に破産寸前の状態でロンドンにやっとのおもいで戻ったというシナリオ

が見えてきてしまう。別の見方をすれば、Strange's Men がランカシャーのスタンリー家の私的な役者のグループから始まって、ロンドンの宿の露天の土の「舞台」で上演し、地方巡業のノウハウも心得て、ついにロンドン演劇界の中心的存在にのし上がるまでの経験と人脈が蓄積された劇団であったのに対し、そこから枝分かれした、劇団として歴史の浅い、もしかして若手中心だったかもしれない Pembroke's Men は、地方巡業で生き延びていくためのしぶとさと経験知を持っていなかったのだろう。

Pembroke's Men が各町で受け取った報酬を記しておく。Strange's Men 同様、数字はシリングで、端数は切り捨ててある。

Rye 13	Bath 16	Bewdley 20	Shrewsbury 40	Coventry 30
Ipswich 13	Leicester 14	York 40		

同じ町が劇団に払う金額でそれぞれの劇団の威信とパトロンに対する敬意を読みとれるとすれば、コヴェントリーが Pembroke's Men に30シリング、Strange's Men に20シリング、レスターが Pembroke's Men に14シリング、Strange's Men に5シリング支払っているのが興味深い。この二つの町は伝統的に役者たちに理解のある町で、地方巡業で劇団が立ち寄ることの多かったところである。Strange's Men が事実上 Admiral's Men と合体した規模の大きい劇団だったことを考慮すれば、少なくとも地方自治体の長の目には、Pembroke's Men は Strange's Men と同等、あるいは格上の役者たちと見られたとも解釈できる。しかし資料が限られており、貴族の地方での政治的威信の問題はそう簡単に判断できるものでもないで、これ以上詮索するのは危険であろう。

肝心のシェイクスピアはこの Pembroke's Men の旅に役者として参加していたのであろうか。残念ながら肯定的な材料は一切見あたらない。むしろ否定的な、多分決定的な事実が一つある。1593年4月に Stationer's Register に登録され、出版されたシェイクスピアの処女長編詩“Venus

and Adonis”,そして1594年5月に同じく登録、出版された長編詩“The Rape of Lucrece”の存在である。この二つの詩はHenry Wriothesley, Earl of Southamptonに捧げられ、シェイクスピアは熱心な献辞を伯爵に書いている。サウサンプトン伯爵に何らかの形でシェイクスピアが接近しようとしたことは明らかである。なぜこの時期に、なぜサウサンプトン伯爵にという疑問にはここでは触れないが、シェイクスピア自身が一介の役者、劇作家であり続けることに不安を感じていたことが一番の原因であろう。確かにヘンリー6世3部作、「リチャード3世」「タイタス・アンドロニカス」などの人気劇で、ライバル劇作家の反感を買うほどのインパクトをもってロンドンの演劇界に出現したシェイクスピアであるが、当時の役者の社会的地位は決して彼を満足させるものではなかった。1590年代の“player”は“vagabond”“vagrant”など住所不定の放浪者のように、「うさんくさい」「まっとうでない」職業であった。ストラットフォードに残した妻と三人の子供に安定した生活を約束し、かつ両親の期待、特に紋章を得て“gentleman”と呼ばれることを望んでいた父ジョンの息子に託す希望に応えなくてはいけないという強い気持ちがシェイクスピアにはあったはずである。明日の生活の保障されない舞台の環境をいつか離れて、土地をストラットフォードに購入してシェイクスピア家を“gentry”の仲間入りさせたい、演劇上のキャリアはそのための方便という長期間の計画がこの時からあったはずである。1593年、シェイクスピアはもうじき30歳に手が届く人生の岐路に立っていたのである。

役者兼劇作家としての活動を続け、かつ苦勞の多い地方巡業に参加し、短期間の間に“Venus and Adonis”と“The Rape of Lucrece”を書き上げるというのは至難の技である。Strange’s Menのためにヘンリー6世3部作を提供した後、1593年1月に疫病悪化による枢密院の劇場閉鎖令が出たことは、劇場以外に将来の道を模索しようとしていたシェイクスピアに恰好のチャンスを与えた。多分役者兼劇作家として所属していたStrange’s Menが地方巡業に出かけるのを機会に、シェイクスピアは別

行動することを決め、あえてロンドンに留まったか、あるいは疫病の危険のない場所に一時身をおいて、かねて暖めていた長編詩の構想を現実のものとしたのであろう。サウサンプトンの私邸にこの間滞在したとするのは全く根拠がない。“Venus and Adonis”が版を重ねて、オックスフォード、ケンブリッジ大学や法学院の学生たちの間でもてはやされ、当時のソネット集のブームとあいまって、シェイクスピアは「詩人」としての名声を確立した。しかし彼が期待したサウサンプトンからの援助はついに得られず（サウサンプトンは William Cecil, Lord Burghley に莫大な金額を借金する可能性があったので、若い無名の詩人を庇護下におく余裕などなかった）、結局劇場に生活の糧を求めることを強いられた。その辺のシェイクスピアの心境は、「ソネット」の中の、例えば“I have gone here and there, / And made myself a motley to the view”(110) の自己卑下ともとれる諦めの気持ちに読みとることができるのかもしれない。

エピローグ

Pembroke's Menが訪れたバース（Bath）で報酬を記した際に、“Receaved of my lord of Penbrokes plaiers for a bowe that was broken by them ijs”という但し書きがつけ加えられている。Pembroke's Men が芝居の上演の際、小道具として町から弓を借りてこれを壊してしまったということであろう。ただでも少ない報酬から2シリングを引かれるのは痛い。壊した役者はこっぴどく幹部にしかられたかもしれない。1 *Contention* もそうだが、特に *True Tragedy* は戦闘の連続であるので、弓矢、槍、甲冑のような武器や装具は必須である。*True Tragedy* の 3H6 2幕6場にあたる場の冒頭のSDには“Enter Clifford, with an arrow in his neck”とある。これは3H6にはない。衝撃的な入場で、舞台効果としては満点だろう。Pembroke's Men がどうやってここを処理したか、これがロンドン公演の際のSDなのか、地方での抜粋

した形の上演の際のSDなのか、想像するのは楽しい。戦闘場面はイギリス史劇の売り物である。スチュアート朝になってイギリス史劇が衰退し、過去の古くさい芝居と化したのを揶揄して、ベン・ジョンソンが*Every Man in His Humour*のプロローグで“or with three rusty swords,／ And help of some few foot - and - half - foote words,／ Fight over York and Lancaster’s long jars”と書いているのは明らかにヘンリー6世3部作を念頭に置いている。ジョンソンの批評を裏返しにすれば，“three rusty swords”に代表される戦闘場面が1590年代には客を呼んだのである。Pembroke’s Menの「折れた弓」が何かを象徴するとしたら、地方の町の上演でもPembroke’s Menの戦闘シーンは思いのほか激しかったということであろう。

NOTES

¹ E K Chambers, *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems* (Oxford: the Clarendon Press, 1988 [1930]), vol. 1, 277.

² E K Chambers, *The Elizabethan Stage* (Oxford: the Clarendon Press, 1965 [1923]), vol. 4, 311.

³ Chambers, *William Shakespeare*, vol.2, 314.

⁴ *The Elizabethan Stage*, vol. 4, 107.

⁵ Ibid. 297.

⁶ Andrew Gurr, “Three Reluctant Patrons and Early Shakespeare”, *Shakespeare Quarterly* 44 (1993), 171. Also, Andrew Gurr, *The Shakespearian Playing Companies* (Oxford: the Clarendon Press, 1996), 71～73.

⁷ Margaret P Hannay, *Philip’s Phoenix: Mary Sidney, Countess of Pembroke* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1990), 22.

⁸ Mary Edmond, “Pembroke’s Men”, *Review of English Studies*

25 (1974), 130.

⁹ David George, “Shakespeare and Pembroke’s Men”, *Shakespeare Quarterly* 32 (1981), 307~13. Scott McMillin, “Simon Jewell and the Queen’s Men”, *Review of English Studies* 27 (1976). Karl P Wentersdorf, “The Origin and Personnel of the Pembroke Company”, *Theatre Research International* 5 (1980), 59~60.

¹⁰ David Kathman, “Reconsidering *The Seven Deadly Sins*”, *Early Theatre* 7 (2004).

¹¹ Jonathan Bate ed., *Titus Andronicus* (Arden 3rd Series), 99. W W Greg, *Dramatic Documents from the Elizabethan Playhouses* (Oxford: the Clarendon Press, 1931), 87, 216. Also Greg’s *The Shakespeare First Folio* (Oxford: the Clarendon Press, 1955), 114~17.

¹² Andrew Gurr, *Shakespeare’s Opposite* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2009), 72~73.

¹³ David George, “Shakespeare and Pembroke’s Men”, 320.

¹⁴ Peter Thomson, “Rogues and Rhetoricians”, *A New History of Early English Drama* (New York: Columbia Univ. Press, 1997), 340. David Bradley, *From Text to Performance in the Elizabethan Theatre* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1992), 50~51. Andrew Gurr, *Shakespearean Playing Companies*, 59 f. Scott McMillin & Sally-Beth MacLean, *The Queen’s Men and Their Plays* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1998), 60~62.

¹⁵ 資料は E K Chambers, *William Shakespeare*, vol. 2, 314~18による。

¹⁶ Bradley, Gurr (*Shakespearean Playing Companies*) はこれとは反対の立場をとる。

¹⁷ E K Chambers, *The Elizabethan Stage*, vol. 1, 332 note. Peter Davidson ed. *Richard III Q₁* (Cambridge: Cambridge Univ. Press,

1996), Introduction 44.

¹⁸ Bradley, *From Text to Performance*, chapter 3 “The Travelling Companies”. E K Chambers, *William Shakespeare*, vol. 1, 215; *The Elizabethan Stage*, vol. 1, 332 note.

¹⁹ Bradley, Appendix “Cast - lists of Public Theatre Plays from 1497 to 1625”.

²⁰ William Montgomery, “The Original Staging of the *First Part of the Contention* (1594)”, *Shakespeare Survey* 41 (1989), 13~22.

²¹ 資料は E K Chambers, *William Shakespeare*, vol. 2 Appendix D “Performances of Plays” による。これ以降の Strange’s Men, Pembroke’s Men の地方巡業のデータ，引用はすべてこの研究より。